北谷町 うちなぁ家

うちなぁ家は、旧目取真家、高倉、フール、ヒンプン等を移築・修復した沖縄の伝統的な屋敷と建物を再現した施設です。

敷地面積：608㎡(約184坪)

平成24年2月、旧目取真家主屋及びふーるが「国登録有形文化財」となりました。

■ 旧目取真家

旧目取真家は、明治23（1890）年頃の建築とされ、平成17年度に移築・修復しました。

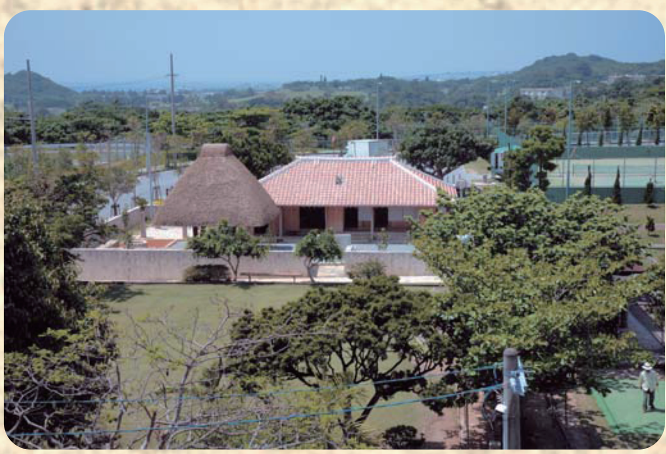
旧所在地：北谷町字吉原
建物面積：約79.3㎡（約24坪）
建　　造：木造平屋建本瓦葺

琉球王国時代の1737年に『敷地家屋の制限令』が定められ、身分によって屋敷の広さ、１室あたり畳数が決められ(平民は１室６畳まで)、平民の瓦葺き屋根は禁止されました。しかし、那覇の平民だけは防火などの理由で瓦葺きは許可されていました。この制度が廃止になったのは、1889(明治22)年で、その後、次第に瓦で屋根を葺いた建物が増えていきました。

屋根獅子（シーサー）

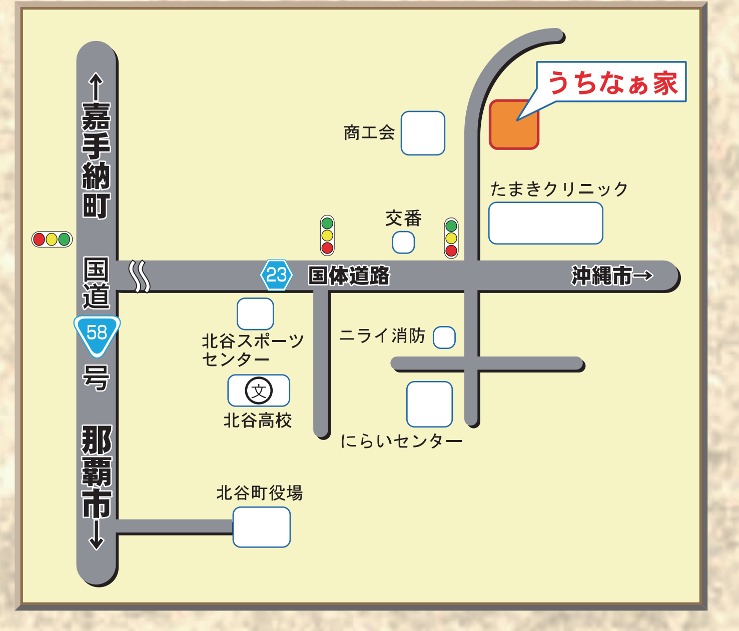
シーサーは、神社や城の門、王家の陵墓、村の出入り口などに置かれ、明治以降、瓦葺き屋根の普及で屋根に獅子像を置くようになったようです。今は残っていませんが、沖縄戦まで字北谷の屋号シーサーニー(獅子根)の屋敷の左角にも東向きの高さ１m程の石獅子がありました。火伏せや悪霊払いなどの意味が込められていたそうです。

北谷町 うちなぁ家



■ 開館時間／午前9時～午後5時
■ 休 館 日／月曜日及び火曜日
　　　　　　祝　日
　　　　　　12月29日～翌年１月３日
　　　　　　６月23日（慰霊の日）

案内図



国登録有形文化財
文化財愛護シンボルマーク

北谷町
うちなぁ家

北谷町教育委員会

TEL：098-936-3159（直　通）
TEL：098-936-1234（内線345）

便所（フール）

旧所在地：北谷町字玉上
構　　造：石　造

南向き屋敷の西北隅に設けられた豚小屋兼用便所で、ウヮーフールともいいます。石造りで中に豚を飼い、人が用をたすと下にいる豚が排泄物を処理する仕組みになっています。中国伝来のものといわれます。

サーター車

構　　造：鉄　車

サトウキビをしぼる車(圧搾機（あっさくき）)のこと。砂糖車は木製から石製に移り変わり、明治初めごろ鉄製の金輪車が製造され、戦後しばらく使用されました。サトウキビをしぼる作業は、牛馬にひかせた砂糖車にサトウキビを挟み込む人(ウージクヮーサー)反対側にいて再び挟み込む人(シブイミー)、最後にしぼり殻を取る人(ウージガラトゥヤー)の三人で行いました。サトウキビのしぼり汁は製造人が鍋で炊いて不純物を取り除き、石灰を入れて固めて仕上げます。

高倉

旧所在地：鹿児島県奄美市笠利町万屋
構　　造：木　造

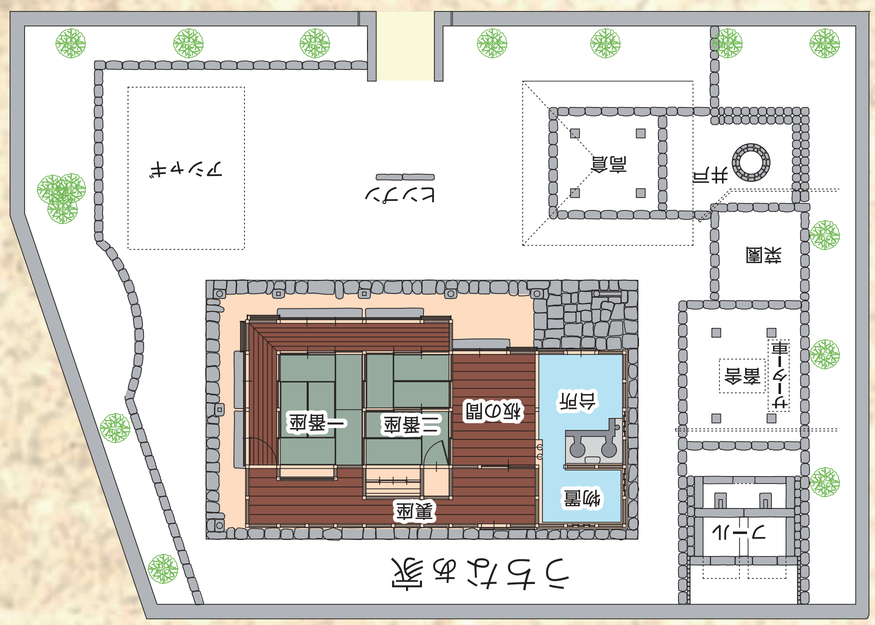
米や粟などの穀物を貯蔵する収納庫で、鼠害や湿気などから防ぐためにゆかをたかくしてあります。「高倉」の所以です。沖縄戦前までは、沖縄のいたるところの農村にありましたが、今ではほとんどみられません。町内でも、かつて北谷や伝道にあったようですが、それらも沖縄戦で跡形もなくなりました。

井戸（カー）

屋敷内に井戸を造る場合、火の神と向き合う形は避けて、門から入って左手の台所の南側か西側に掘りますが、水脈との関係から一番座の東側に掘ることもありました。

裏座敷（クチャ）

クチャは一番座と二番座の裏にあり、ほとんどの家が表座敷に比べ狭く仕切りのない細長い造りになっていました。そこは老人や病人の寝間、産室、調味料などを入れた甕や壺の保管に使っていました。



畜舎（イチムシヤー）

正面から入って左手、台所の西側に建てられた家畜小屋のこと。屋根はほとんどが茅葺きでしたが、瓦を葺く裕福な家もありました。また、掘建て小屋に並んで農具や薪などを保管する納屋を設ける家もありました。

客室（一番座）

一番座は門に向かって家屋の一番左側に位置し、旧家や富家では床の間を設け掛け軸を飾っていました。祝宴の時に男性を接待する部屋でもありました。

仏間（二番座）

二番座は仏壇・位牌を安置する部屋(仏間)であり、家族が寝起きする部屋(居間)であり、家族が食事をする部屋(茶の間)でもありました。

台所

首里・那覇ではデージュといっていましたが、今ではシム(下)がよく使われています。デージュは台所、シムは台所が母屋の下手にある事からついた呼称です。

アシャギ（離れ）

離れ家屋のこと。アサギ、アシャギグヮー、メーヌヤー(前の家)ともいいます。旧家や富家にあって、母屋の前庭に向かう別棟の来客用建物。二部屋からなって、母屋の一番座に縁または雨端(雨庇)で接続されたのもありました。

北谷町うちなあ家

シンメーナービ

大鍋の名称で、結婚披露宴や家の完成祝いのときに、大勢の料理を作ったり日頃は餅を蒸したり、芋を煮るのに用いた。半球体に近い丸みを帯びた鉄鋼製で、お米が６升炊けるほどの大きさ。

カマンタ

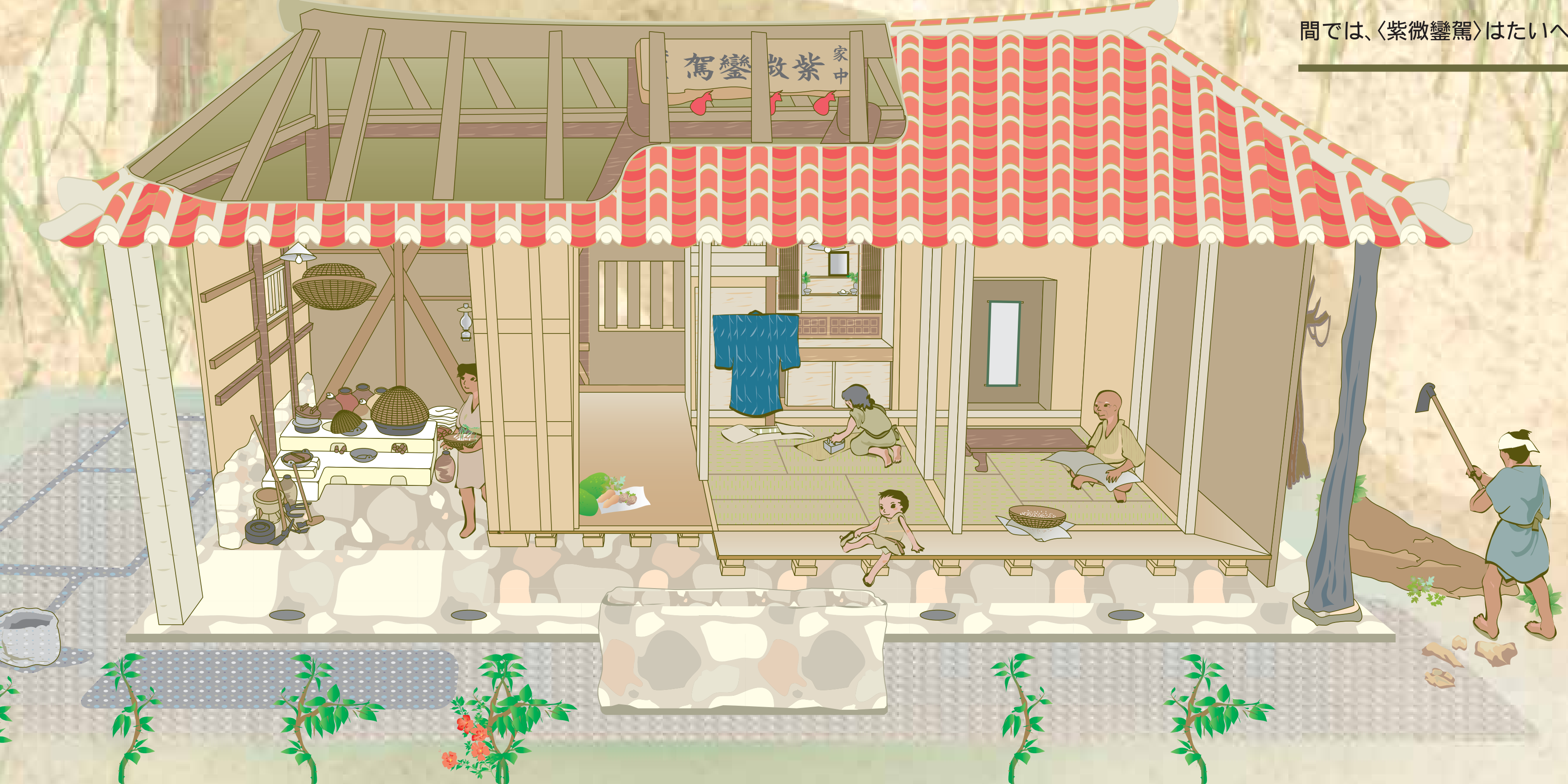
豚の飼料のイモを煮たり、祝日に餅を蒸すのに比較的大きな鍋が使われたが、そのふたがカマンタである。材料はすすきを使い、細かくさいた竹で編んだのがほとんどだが、田舎ではすすきのかわりにわらを使い、竹やわら縄で編むこともあった。カマンタをかけて煮ると編み目から水蒸気が出るために、中の温度が適度に調整され、中の物がおいしく炊きあがる。

紫微鑾駕（しびらんか）

中国起源の呪語。木造家屋の棟上げ式に除災招福として、棟梁が板に墨書して棟木に打ち付けた四文字の呪語。『沖縄大百科事典』によると〈紫微鑾駕〉は道教でいう北極星を神格化した北極紫微大帝が来て家を守ってほしいという意味。沖縄の大工の間では、〈紫微鑾駕〉はたいへん優秀だった中国の大工の名前だと伝わる。

屏風（ヒンプン）

屋敷の正面の門と母屋の間に設けられた内外の仕切り塀のこと。外から直接家の中が見通せないようにという実用的な機能と、魔物の侵入を防ぐという信仰的な役割も担っている。昔は屋敷内へ出入りする場合は、ヒンプンに向かって左右どちらを通るか決まっていた。一般に男性は右側、女性は左側という。しかし、男性であっても右側を使用するのは正月やお盆のような特別な日か、身分の高い人に限るともいう。



羽釜（ハガマ）

炊飯用の釜。底が深く、外側中央につばがついた鉄釜。かつては米の飯を常食にする家は少なく、多くの家ではサツマイモ、その他の雑穀を主食にし、普通の鉄釜を用いていたので、ハガマを所持する家はまれだった。

『沖縄大百科事典』。

アンダガーミ

戦前、台所をのぞくと家庭でも食用油や味噌、塩などをいれた甕や壺をみることができた。食用油を入れた甕をアンダーガーミ、壺をアンダチブといった。

サギジョーキ

ごちそうや食品の残りなどを入れて保存する蓋付きカゴ。台所内や軒の風通しのよい場所につり下げた。この形は明治以降に入った新しいタイプで、古くはざるを二つ重ねてひもでつっていた。

『沖縄大百科事典』。

ミージョーキ

竹製の平型円形の箕（み）。地域によってはミーバーラー、ムイジョーキ、ソイなどとも呼ばれる。米、麦などの穀類をふるって、殻やゴミを分けたり、餅作りなどに用いられる。用途によって目の粗さが異なる。

イシターレー（石たらい）

石灰岩を彫り込んで製作されたもので、井戸の側に設置し、洗面や手足を洗ったり、サツマイモや野菜などの農作物を洗ったり、鍬や鎌などの農具類も洗った。また防火の役割もあった。